

# 犬飼先生を送る

— etwas glücklich etwas traurig —

中 村 浩 平

犬飼先生はこの三月に繰り上げ定年制度を利用して、退職されました。在職期間は二十六年になります。四半世紀を越えていますから、十分に長い期間でしたが、同僚としていつも側にいた私にはあつという間のことでした。しかしこの間、公私ともに色々とあつて、想い出は尽きません。

四月になって、慌ただしく学年の初めを過ごしていた頃は、忙しさもあつてそれ程でもなかったのですが、少しく周囲が落ち着いてくると、隣の部屋（元の犬飼研究室）の明かりが気になりました。ふと明かりに誘われて、ドアをノックしたい気持ちに駆られますが、今は別の先生の研究室で、それは出来ません。以前は明かりが点いていると、必ず立ち寄って挨拶を交わし、一寸した会話をしたものです。今は明かりが灯っているのを見ても、黙って前を通り過ぎるだけです。「中村さん、昼ご飯食べた!? まだだったら一緒に食べよう!」という犬飼先生の元気な声ももう耳に届かなくなりました。人が去るといふのはこういうことなのだあとつくづく思います。本当に寂しいものです。

ところで、先生が神大に赴任されたのは、ドイツから帰ってまだそれ程経っていない頃で、ドイツ精神の固まりみたいでした。ドイツ精神の具現者のように、ドイツ的合理主義を周囲に徹底させようとした。「中村さん、これおかしいよ。抗議してきてよ。」というドイツ合理主義に裏打ちされた言葉に、私は理を認め、学内を右往左往したものでした。

先生はまたエネルギーの固まりみたいでした。とてもお元気でした。そして先生のこのドイツ的合理主義と元氣さが、外国語研究センター所長の時に、難攻不落の城を攻め落とすという快挙を成し遂げました。

ある時構内で、ある先生が「犬飼先生の変わりようには驚いた。前とは別人のよう」と私に話しましたが、それも当然のこと、ゲーテも述べているとおり、人間は生成する存在なのです。ドイツ精神を身体一杯に含んでいる犬飼先生が変わらない筈はありません。たしかに、側でいつも接していると変化にはあまり気が付かないことがあります。変化は徐々に来るのでなおさらです。それでも、私には先生の変化が認められました。おそらく、病をされてからのことと思いますが、しかし本来的には人間的成熟から来ていると思われれます。

いま先生との最後の日々の会話を思い起こしてみますと、性急さの中にも、はっきりとそれを認めることが出来ます。その人間的成熟が先生をして、これからの人生を余裕を持って実り豊かに過ごせるように、大学を去らせたのだと思います。それは素晴らしい決断だと思います。そして先生の下された決断が将来きつとおおになるものをもたらすであろうと、信じています。

先生はいま無病息災ならぬ一病息災で、健康状態をドイツ的合理精神で見事に自己管理下に置き、急がず、慌てず、快適に日々を過ごして居られるようです。長らく先生の健康状態を眺めてきた者として、ときには大きな不安を感じたこともありましたが、いまのお元氣なご様子には安堵感を覚えます。

願わくは、われわれにこれからの人生の生き様を示され、生を全うされますように。